

ジェイムズ・ボズウェルの
『サミュエル・ジョンソン伝』への一考察

中 村 賢 一

I

The Development of English Biography (1959) の中で、著者 Harold Nicolson, (1886-1968) は、次のように述べている。

... We must segregate him from his opportunity. For his amazing good fortune in having Johnson as a subject is essentially an external factor, and has little to do with the quality of Boswell's mind or talent.¹

この著者は、James Boswell (1740-1795) の精神、才能に対して疑問を投げかけている。

ところで、この『伝記』の柱となっているものは何か。ボズウェルは、『ジョンソン伝』(*The Life of Samuel Johnson*, 1791) の「序論」でこう述べている。

What I consider as the peculiar value of the following work is, the quantity it contains of Johnson's conversation.²

ボズウェルは、この『伝記』を魅力あるものにするために、Samuel Johnson, (1709-1784) の会話を多く入れた。それは、彼にとりジョンソンの一言一句が、興味深いのみならず、人生の指針

を与えてくれると考えたからである。近づき難い風格を持つジョンソンに、親しみを持つことのできる人間味あふれる姿を与えようとした。というのは、彼の唯一の慰めは、人と交わって会話を楽しむことにあったからである。それに、ジョンソンの会話の中にこそ、生き生きとした人間像を見ることができると考えたからである。しかし、ボズウェルは、ジョンソンの会話を傍観し、ただ書き取ったのではなかった。

1769年ジョンソンの自宅において、ボズウェルは、『ジョンソン伝』の中で、赤ん坊 (Baby) を話題にする。

... "If, Sir, you were shut up in a castle, and a newborn child with you, what would you do?" Johnson. "Why, sir, I should not much like my company." Boswell. "But would you take the trouble of rearing it?" ... [Johnson] replied, "Why yes, Sir, ... and wash it much, and with warm water ... Boswell. "But, Sir, does not heart relax³

ここには、まったく奇妙な質問をすることによって、ジョンソンをやりこめようとしているところが、うかがわれる。というのは、ジョンソン自身子供がいないし、また、私塾を開いても、生徒が二人しか集まらず、すぐやめているという事実を、ボズウェルは知っていたからである。

ボズウェルの一つの特徴として、まず質問をしてからジョンソンに答えを求めるところがある。そして、その答えに対して意見を述べ、つぎつぎと話を発展させ、ジョンソンの本音を引き出し、彼の魅力を読者に伝えようとする意図がうかがわれる。

つぎに、ボズウェルは、まったく異なる政治的信条を有するジョンソン (トーリー党支持) と、John Wilkes (1727-1797、ホイッグ

党支持)を対面させてみようと計画した。

しかし、もしジョンソンに対し単刀直入にウィルクスと会うよう提案したならば、彼が顔色を変えて怒ることは明白であった。そこでボズウェルは、巧妙な作戦を練ったのである。つまり、ウィルクスの名を直接告げず、本屋の Mr. Dilly がパーティーに招待したいとっている旨をジョンソンに伝え、つづけて他の招待客の顔触れが気に入るか、どうかボズウェルは尋ねている。それに対して、ジョンソンは、つぎのように答え、作戦はみごとに成功を収めた。

... Do you think I am so ignorant of the world, as to imagine that I am to prescribe to a gentleman what company he is to have at his table?" Boswell. "I beg your pardon, ... when we entered Mr. Dilly's drawing-room he found himself in the midst of a company he did not know. I kept myself snug and silent, watching how he would conduct himself."⁴

ジョンソンもウィルクスも古典に明るく、スコットランド嫌いなので、座談はスムーズに運び、後に Edmund Burke (1729-1797) が "there was nothing equal to it in the whole history of the Corps Diplomatique"⁵ と語ったほどであった。

ボズウェルは、いろいろ工夫して、ジョンソンを劇的な場面の中に置いている。

ところで、スコットランド嫌いの二人の会話によりスコットランド生まれのボズウェルは、さぞかし自尊心が傷つけられたと思われる。しかし、おのずからこの場面を作り出すために、プライドを捨てているように見える。この顕著な例として、ジョンソンとの出会いの場面がある。

... I was much agitated; and recollecting his prejudice against

the Scotch, of which I had heard much, I said to Davies, "Don't tell where I come from."⁶

ボズウェルは、さまざまな場面で、スコットランドのことを話題にすると、自己の感情が傷つくことを十二分に知っていながら、その後も何度となく自国を話題にしている。彼は人一倍スコットランドを愛する人間の一人であったのである。

ところで、今世紀発見された『ボズウェル日記』(*Boswell's Papers*) のなかの『ロンドン・ジャーナル (*London Journal*, 1950) には、イングランド人に対する敵意が伝わってくる場面が散見される。これは、ボズウェルが喜歌劇を見に行き、同国人が、イングランド人からひどい侮辱を受ける場面に遭遇した時の出来事である。

... The mob in the upper gallery roared out, "No Scots! No Scots! Out with them!" hissed and pelted them with apples. my Scotch blood boiled with indignation. ... I hated the English.⁷

これほど自国を愛するボズウェルであるにもかかわらず、『ジョンソン伝』の中における彼は、自己の感情を必死になって押し殺そうとまでしている。いったい何故であろうか。ジョンソンは、ボズウェルの母国の悪口を言って、楽しんでいたふしがある。それをボズウェルは逆に利用したのであって、少しでも多くのジョンソンの言葉を引き出したかったのであろう。

II

『ロンドン・ジャーナル』の序論で、ボズウェルは、このように記

している。

... A man cannot know himself better than by attending to the feelings of his heart and to his external actions, from which he may tolerable certainty judge "what manner of person he is."⁸

自己を知る唯一の方法は、自己の感情をみつめるだけでなく、外的世界とのかかわりを持つことが肝要であるとボズウェルは考えている。具体的に彼が実行に移した事は、日記をつけること、もう一つは、豊かな経験を持った名士と交際することであった。

ところで、親子ほど違うボズウェルが、ジョンソンの心を自由にコントロールする力は、いかにして養われたのか。それは天性のものだったのか。

ボズウェル研究の第一人者 Chauncey Brewster Tinker は、*Young Boswell* (1922) の中でこう述べている。

... Boswell was one of those unusual young persons who deliberately and by preference seek out the companionship of men twice their age. ... Association with younger men he found vivacious but profitless;⁹

真の心の充実感を満たすために、ボズウェルは、経験豊かな年上の人達から、人生の意義を探り出そうとした。彼にとって至高の善は、豊かな経験を持つことであった。彼らに会うことは、ボズウェル自身を知ることにつながってゆく。そのことによって、自己の内面を大きく変革しようとして彼はした。また、人との出会いを通じてジョンソンの心を引きつける術を学んでいった。この経験が生かされ、巧みにジョンソンから、おもしろい話を引き出した。ボズウェルが、『ジョンソン伝』の中に、ジョンソンの会話を多く入れ、この『伝記』の柱にしたのは、自己の経験に基づいたものであった。

ボズウェルは、満されない不安定な心をいやすかのように、ジョンソンと出会ってからしばらくして、さらに Jean-Jacques Rousseau (1712-1778) に面会を求めている。ルソーはまったくジョンソンとは正反対の人物であり、後に、このことをジョンソンに話すと、“Sir, if you are talking jestingly of this, I don't talk with you. If you mean to be serious, I think him one of the worst of men”¹⁰ と言われたと記し、さらにこの見解に対して、“Nor can I yet allow that he deerves the very severe censure which Johnson pronounced upon him.”¹¹ とボズウェルは、『ジョンソン伝』の中で率直に語っている。

ボズウェルには、確固とした政治的信条や、主義があるのではなく、常に自己をみつめ、人間的に成長したいという気持があった。そして、自己を教え、導いてくれる人を求めた。そういった人々から有益な話を聞き、いわゆる、生きた勉強をしていたのであった。彼は、会話のすばらしさを十二分に知り、この『伝記』にジョンソンの会話を入れ、読者にも生きる慰めを与えようとしたのである。

ところで、ニコルソンは、ボズウェルの人間性に言及して、“The problem which has puzzled so many critics ... is how a man so palpably silly as Boswell could have written what is rightly regarded as the greatest of English biographies.”¹² と述べている。しかし、前述したところからも分かるように、ニコルソンの見解は必ずしも当を得ているとは、考えられない。

ところで、ボズウェルは、1764年12月3日付の『日記』にルソーとの出会いのときのことをこう書き記している。

... I was filled with anxiety. Is not this romantic madness? ...
But perhaps I may appear to him [Rousseau] so vain, or so

extraordinary, that he [Rousseau] may be shocked by such a character and may not admit me.¹³

24才で無名なボズウェルが、人に会うことを嫌うルソーに会おうとしたことは、一見、無謀にみえるかもしれないが、ボズウェルにとっては、自己の不安定な心を強くするために、どうしても彼に会いたかったのである。愚かな人間であるなら、自己内省はない。上文中の “Is not this romantic madness?”, “I may appear to him so vain, or so extraordinary, ...” などという彼の言葉は、それまでなされてきた批評の誤りを示しているように思われる。

さらにボズウェルは、ルソーに会うまでの経過をこう記している。

... I expected, “Now I shall see him”—but it was not so. ... My fancy formed many, many a portrait of the wild philosopher. At length his door opened and I beheld him, a genteel black man in the dress of an Armenian.¹⁴

ここまで来るには、なみたいていの努力ではなかった。彼に会いたいと願い、望みがかなえられなかった人達が、大勢いたからである。何故、ボズウェルは、ルソーに会うことができたのか。たしかに二人に共通している所はナイーブな性格である。

ところで、上文中の記述をみると、単なる日記とは異なり、サスペンス・ドラマ風の書き方であり、明らかに読者を意識しているように思われる。

ルソーがボズウェルに会う気持ちになったのは、彼の熱意、率直な精神のみならず、手紙の中に文学的才能を見い出していたからではないだろうか。

III

ティンカーは、『ボズウェル日記』から彼の文学的才能を見出そうとしている。つぎはボズウェルが大陸旅行をしていた際に、オランダ西部、ライデンに立ち寄り、ある店で食事をした。その時三人連れの騒々しいお客が入ってきて、大きな物音をたてた。

ボズウェルは、そのときのことをこう記している。

... The waiter thought it incumbent upon him to make an apology for their roughness. "Sir", said he, "they are very good-natured gentlemen." "Yes, yes," said Boswell, "I see they are very good-natured gentlemen, and in my opinion, sir, the dog seems to be as good-natured as any of the three."¹⁵

この中には、すばらしいウィットは含まれていない。しかし、日常の平凡な事象を劇的に表現し、生き生きとした場面を写し出している。さらにつぎの『日記』の中にも劇的な特徴を見ることができる。

... Lady Mirabel. You don't play, Mr. Boswell. Boswell. No, Madam, I never do; and yet I am very well amused here. I can have a great deal of entertainment just by looking around me. Lady Mirabel. Indeed, Sir, he must be extremely clever.¹⁶

このように『ボズウェル日記』は、劇のような書き方である。普通の書き方なら、—She said to me; "don't you play?" I said to her, "No, I never do."—のようになるであろう。

ところで、ボズウェルは『ジョンソン伝』において、ジョンソンとの会話の場面を、生き生きと劇的に描き出すためには、かれの文学的才能はもちろんのこと、ボズウェルが、その材料になる実際の

場面を正確に記憶していなければならない。たぐいまれなる記憶力と再生力を必要とする。ジョンソンの死後、いかなる方法でその場面を記憶できたのか。ボズウェルの独特なる速記法および、日記からある程度、それは可能であったろう。しかし、いかなる人間でも、すべてを完全に記憶することはできないであろう。

だが、心理学の教えるところによれば、それに近い状態を作り出すことができるのである。異常なまでの集中力、自己の興味に適合し、強く印象づけられたもの、つまり、その人間にとって、もっとも興味を引くものは、記憶されるのである。

ボズウェルの『ジョンソン伝』は、はたしてすべて事実に基づいて書かれているのか。

IV

『ボズウェル日記』の中で、ルソーにあてた手紙には、こう記されている。

... I have been in Holland and in Germany, but not yet in France. ... I am traveling with a genuine desire to improve myself. I have come here in the hope of seeing you.¹⁷

“improve myself” という言葉は、前述したボズウェル自身が人間的に成熟すること、また人生の意義を見出し、心の平安を保つことも含まれるが、彼の心には、すべてをだめにしてしまうほどの力を持つ、‘melancholy’ という心の病気があった。名士に出会いを求めた最大の理由は、この ‘melancholy’ であった。

ところで『ジョンソン伝』の中には、ジョンソンの ‘melancholy’ についての記述が多くみられる。もちろん、ジョンソン自身もそれに

悩んだ。けれども、実は、彼以上にボズウェルは重い ‘melancholy’ に悩んでいたのではなかったのか。

1765年10月3日付のルソーにあてた手紙の中には、ボズウェルの ‘melancholy’ の苦しみが記されている。

... I know my worth sometimes, and I think and act nobly. But then melancholy attacks me, ... I always preserved a certain external decency of character. But I suffered cruelly from hypochondria, whose pains are unimaginable to those who have not felt them.¹⁸

ボズウェルは、この ‘melancholy’ をいやすために大陸を旅し、うっ積した感情をルソー、のみならず多くの名士に会い、それをこと細かに書き記した。

『ジョンソン伝』の中で、ボズウェルがジョンソンの ‘melancholy’ を語る記述には、実は、ボズウェル自身の感情が、かなり入っていると考えられる。つまり、自己投影されているわけである。

ボズウェルは、『ジョンソン伝』の中で、ジョンソンの ‘melancholy’ について、このように述べている。

... While he was at Lichfield, in the college vacation ..., he felt himself overwhelmed with an horrible hypochondria, with perpetual irritation, fretfulness, and impatience; and with a dejection, gloom, and despair, which made existence misery.¹⁹

これは、『ボズウェル日記』の中にみられる記述によく似ている。ボズウェルの ‘melancholy’ をジョンソンに重ね合わせながら、書いていると考えられる。

さらに、力強い精神力を持つ人間は、悪天候にも心を左右されないとするジョンソンの言葉に対して、ボズウェルはこう反論してい

る。

... where the frame has delicate fibres, and there is a fine sensibility, such influences of the air are irresistible. ... Such boasting of the mind is false elevation.²⁰

しかし、何故、このような取るに足りない事にボズウェルは立腹したのか。“where the frame has delicate fibres, and there is a fine sensibility” という言葉は、実は、ボズウェル自身のことを言っているのではないか。

ところで、ボズウェルには少年時代からの親友がいた。彼の名前は、John Johnston と言い、後に事務弁護士になった。ボズウェルが、スコットランドを離れている間、彼はボズウェルの公務を代行していた。この手紙は、『ロンドン・ジャーナル』にはないものである。ボズウェルは、ロンドンから彼に手紙を送っている。その日付は、1763年6月30日である。

... melancholy is always weighing me down, and rendering me indifferent to all pursuits. For these two days past, I have been very bad (owing to thick, rainy weather) and have been viewing all things in the most disagreeable light.²¹

前述したように、繊細な神経を持つ彼には、天候というものが、いかに自分の心に影響を与えるものであるか身にしみてわかっていたので、このジョンソンの言葉にこだわったのである。

さらに、『ジョンソン伝』の中で、画家 Sir Joshua Reynolds, (1723-1792)からジョンソンの奇妙な癖について、ボズウェルは、このように聞いたと語っている。

... My opinion is, that it proceeded from a habit which he had indulged himself in, of accompanying his thoughts with certain

untoward actions, and those actions always appeared to me as if they were meant to reprobate some part of his past conduct.²²

実は、ボズウェルが、そう思ったのではなかったのか。傷つきやすい神経を持った彼には、自己の心の傷が、ジョンソンの体に投影されたのではないか。

以上、ボズウェルの 'melancholy' について述べてきたが、先に彼が『日記』の中に記した言葉—"A man cannot know himself better than by attending to the feelings of his heart and to his external actions,"—にあるように、ボズウェルは、自己観察と人との交わりをバランスよく行ない、人間的に成長し、'melancholy' を克服しようとしたのである。

ところで、Bertrand Russell (1872-1970) は、人間が真に成熟するためには、次の要素が必要であると語っている。

... The mind is a strange machine which can combine the materials offered to it in the most astonishing ways, but without materials from the external world it is powerless,²³

精神は、外部との接触による経験という材料がなければ、まったく無力なものであると語っているラッセルであるが、ボズウェルは、自己の心の不安をみつめ、それを人との接触によっていやすことに努め、さらに、よりいっそう心の奥をのぞき込むために、自己の感情を詳細に『日記』に書きとめた。ボズウェルは、ジョンソンに出会い、彼の『伝記』を書くことにより、自分の中にある 'melancholy' を克服しようとしたのであった。

V

人間の本質を見抜く目を持っていたジョンソンとの出会いにより、ボズウェルは、『ジョンソン伝』を書く決意をした。ボズウェル自身、数多くの名士との出会いにより、『伝記』の対象になるにふさわしい人物を正確に判断することができた。

彼の人生探究への熱情には、非常なものがあつた。それは彼が、少しのことにも深く悩み苦しむデリケートな神経の持ち主であつたからである。心の平安を求めて、ボズウェルは、数多くの名士に出会いを求め、心の傷をいやそうとしたのである。その中から彼は、人生における有益な知恵のみならず、会話のすばらしさを知つた。また、人間を正確に判断し、人の心をつかむ術を学んだ。ボズウェルが『ジョンソン伝』の柱に、「ジョンソンの座談」(Johnson's Conversation) を置いたのは、名士と交わり会話の術を学んだ経験が生きているからである。

巧みな会話をマスターしたボズウェルは、単にジョンソンの会話を書き取り、メモしたのではなく、彼の含蓄ある言葉を引き出すべく努力した。彼の魅力をあまねく読者に伝えようと、みずからが標的になり、ジョンソンの魅力を引き出した。劇的な場面を作り出し、彼にスポットライトをあて、今まで知られていない、どんなジョンソンが現われてくるかを観察した。

ところで、ボズウェルとジョンソンには、二つの共通点があつた。すなわち、'melancholy' と、人間に関する強い関心である。ジョンソンは、'melancholy' を座談によって慰めようとした。一方、ボズウェルは、名士と話し、それを詳しく書きとめることで、自己の不安を安定させようとした。二人は、ともに人間に関する興味から『伝記』を執筆している。彼等の出会いは、当然の結果であつたと言

えよう。

従来、ニコルソンの言うように、ジョンソンとの結びつきによってしか論じられてこなかったが、ボズウェルは、自己の天性としての文学的資質をジョンソンに会う前から持っていたのである。

以上の点から、『ジョンソン伝』は、ジョンソンとボズウェルの魂が、一体となって融合し、生まれた伝記であると言える。

注

- 1 Harold Nicolson, *The Development of English Biography* (London: The Hogarth Press, 1959) pp. 94-95.
- 2 James Boswell, *The Life of Samuel Johnson* (New York: Everyman's Library, 1991) vol. I p. 12.
- 3 *Ibid.*, vol. I p. 375.
- 4 *Ibid.*, vol. II pp. 42-44.
- 5 *Ibid.*, vol. II p. 51.
- 6 *Ibid.*, vol. I p. 247.
- 7 Frederick A. Pottle, *Boswell's London Journal* (New York: The McGraw-Hill Book, 1950) p. 71.
- 8 *Ibid.*, p. 39.
- 9 Chauncey Brewster Tinker, *Young Boswell* (Boston: The Atlantic Monthly Press, 1922) p. 92.
- 10 James Boswell, *The Life of Samuel Johnson* (New York: Everyman's Library, 1991) vol. I p. 320.
- 11 *Ibid.*, p. 320.
- 12 Harold Nicolson, *The Development of English Biography* (London: The Hogarth Press, 1959) p. 88.
- 13 Frederick A. Pottle, *Boswell on the Grand Tour Germany and Switzerland 1764* (New York: McGraw Hill, 1953) p. 217.
- 14 *Ibid.*, pp. 220-221.
- 15 Chauncey Brewster Tinker, *Young Boswell* (Boston: The At-

- Atlantic Monthly Press, 1922) p. 38.
- 16 Frederick A. Pottle, *Boswell's London Journal* (New York: The McGraw-Hill Book, 1950) p. 142.
 - 17 _____, *Boswell on the Grand Tour Germany and Switzerland 1764* (New York: McGraw-Hill, 1953) p. 218.
 - 18 Frank Brady and Frederick A. Pottle, *Boswell on the Grand Tour Italy, Corsica, and France 1765-1766* (New York: McGraw-Hill, 1955) pp. 4-7.
 - 19 James Boswell, *The Life of Samuel Johnson* (New York: Everyman's Library, 1991) p. 33.
 - 20 *Ibid.*, p. 207.
 - 21 Chauncey Brewster Tinker, *Young Boswell* (Boston: The Atlantic Monthly Press, 1922) p. 20.
 - 22 James Boswell, *The Life of Samuel Johnson* (New York: Everyman's Library, 1991) p. 86.
 - 23 Bertrand Russell, *The Conquest of Happiness* (New York: Bantam Book, 1968) p. 114.